

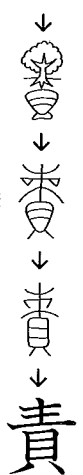
責

五年

回数 11
筆順 十 五 責

オン セキ
クン セリめる

成り立ち



とげのある木を表した「束」の形の変化した「責」と、お金の意味を表した「貝」とを組み合わせて作った字です。

「かしたお金を、返せと言って、せめる」ことを表した字です。「当然果たすべき義務を果たせと言って、とがめる」ことです。【例】問責、面責、自責。

また、「当然果たすべき義務」という意味にも使います。【例】責務、責任、職責、重責。

使い方

- ▽ 重大な責務を果たすことができなかつたのですからどんなに責められても仕方がないと覚悟しています。
- ▽ そのように無責任な行為は、とても見のがすことにはできません。

熟語例

- ▽ 責務（務は、しなければならない仕事。当然果たすべき義務）
- ▽ 責任（任は、任せられた仕事。当然果たすべき義務と同じ意味）
- ▽ 職責（職務上の責任。その職にある者としての責務）
- ▽ 重責（重い責任。【例】首相は一国を治める重責があるから大変です。）
- ▽ 引責（責任を取ることを言います。責任を取ってその職を退くことを「引責退職」と言います。）
- ▽ 問責（責任を問うこと。また、問い責めること。）
- ▽ 面責（面と向かって責めること。【例】する休みして先生に面責されました。）
- ▽ 自責（自分で自分を責めること。【例】責める人がいないだけに自責の念に駆られます。）

績

五年

回数 17
筆順 十 五 績

オン セキ
クン セリめる

成り立ち



「責める」という意味の「責（咎760）」と、「糸」とを組み合わせて作った字です。

「繭や綿から糸を取り出し、よりをかけて糸に仕上げること（これを「紡ぐ」と言います）」を表したものです。この仕事は、新しい糸口を取り上げて、次から次とたえず送りこまなければなりませんから、「責め立てられるようだ」ということで、「績」と言ったものです。ふつう「紡績」と言います。

また、昔は、この仕事は女の人のたいせつな仕事で、どの家でもしました。それで、「仕事」と言えば「紡績の仕事」にきまっていたので、「仕事」という意味に使われるようになりました。また、「仕事の成果」の意味にも使われます。

使い方

- ▽ 今は、紡績工場の機械で糸が作られますが、昔は、家ごとに人手を使って糸を紡ぎましたから、それは大変な仕事だったようです。
- ▽ うちのお母さんは、「学校の成績の良い悪いは問題ではありません。努力がたいせつで、努力した結果、成績が悪くても、決してお母さんは責めません」と言いました。

熟語例

- ▽ 紡績（紡も績も「つむぐ」こと。繭や綿からとった糸は細いので何本も合わせてよりをかけ、一本の糸に仕上げます。よりをかけるのに「つむ」という重りを使うので「つむぐ」と言います。）
- ▽ 成績（「成」と「績」という意味で、「仕事のできぐあい」のことを言います。）
- ▽ 業績（業は「仕事」。仕事のできぐあい。成果）
- ▽ 功績（功は「手がら」。りっぱな成績）
- ▽ 実績（実際の成績。また、実際の功績。【例】大いに実績をあげる。）
- ▽ 事績（事業に伴う実績。または功績）